

# 河川沿いの看板・広告物に着目した景観の変化に関する研究

## - 福岡市中洲地区を対象として -

余語 大地

### 1. 研究の概要

#### 1-1. 背景と目的

都市部において水辺は人々の活動と密接な関係を築いてきた。近年では水辺を都市のアメニティを向上する要素として注目されており、福岡市においても、水辺を眺望するオープンスペースの整備や、店舗を備えたビルの立地が進んでいる<sup>1)</sup>。そのため水辺の景観は都市のアメニティの重要な要素の一つである。

また、本研究の対象である中洲地区においては、高層ビルの建築から50年に迫っており、今後建て替えが進み、景観が大きく変化することが予想される。こうした状況の中で、本研究では中洲地区の景観の形成過程を看板・広告物の立地に着目し、土地利用と都市機能の整備の観点から分析し、今後の水辺の景観を考えるための基礎的資料となることを目的とする。

#### 1-2. 既往研究の整理と本研究の新規性

古写真に基づいた河川景観を取り扱った研究として平岡ら<sup>2)</sup>は長野県天竜川において高度経済成長期以前に撮影された写真を用いて、土木整備による視覚的分断や住民の河川整備に対する意識の希薄さを指摘した。また、萩島<sup>3)</sup>、鶴ら<sup>4)</sup>の一連の研究では、風景面に描かれた河川景観の構図を分析し、風景面に描かれた河川の特徴を明らかにした。これらは郊外部や歴史都市を対象にしている。水辺の利用に関する研究として宮崎ら<sup>5)</sup>は、文献資料から博多川・那珂川周辺の近代以降の水辺利用の特徴を土地利用、都市構造の観点から分析した。本研究は、近代以降の沿川市街地の景観変化を、特に看板・広告物の立地と土地利用の観点から分析する点において新規性がある。

#### 1-3. 研究対象地

本研究では対象地として福岡市中心部を流れる那珂川を選定し、複数の写真から河川沿いの建築物が判読



図1 研究対象地

できる中洲4丁目及び、中洲5丁目と中洲2丁目の一部（西中島橋～春吉橋）を分析の対象とした（図1）。これらの範囲を「東中洲」と呼称する。

#### 1-4. 研究の構成と手法

2章では景観の復元図をもとに各年代の景観の変化について分析する。3章では、住宅地図等の古地図や郷土史資料、関係者へのヒアリング調査から、主要な施設の分布や土地所有の変遷を把握し、中洲の成長過程や土地利用の変化の一端を明らかにする。4章では、景観を構成する要素の一つとして広告物に着目し、立地や数量の変化について分析する。以上を踏まえて5章では、中洲の景観の形成過程とその要因について、眺望性の変容と併せて考察する。

### 2. 東中洲の景観の変化

#### 2-1. 分析の枠組み

文献資料と絵葉書<sup>1)</sup>から戦前、戦後3年代及び現在の景観復元図を作成し<sup>2)</sup>（図2）、住宅地図等から建築物の用途を把握した。当該地区は戦災復興により、道路骨格が一新されたため、まず、戦前期と戦後期の景観を比較する。戦後期は研究対象地を街区A~Fに分割し、各年代ごとに景観の変化を分析する。景観の変化には建築物や屋外広告物の建て替え/解体（新設/撤去）等の建築物の存非による変化と、ファサードの改修等による建築物の変容による変化があるが、本研究では資料的制約から前者の大きな変化に限定し、ファサード等は特筆すべき点のみ言及する。なお、街路樹や植栽等は写真の撮影時期により変化するため考慮しない。

#### 2-2. 建築物の変化

戦前期の東中洲の景観は河川に隣接した2層～3層の低層木造建築物（以下、低層木造）を中心に構成されていたが、明治通り沿いには広告塔やRC構造の建築物が立地した。1945年、建物疎開や福岡大空襲により河川沿いの低層木造は解体・焼失し、跡地は戦災復興事業により歩行者空間に一新された。戦後10年経過した1956年頃の東中洲は、明治通り付近の街区A～Cでホテル（A1-2,A1-3,A1-4）やテナントビル

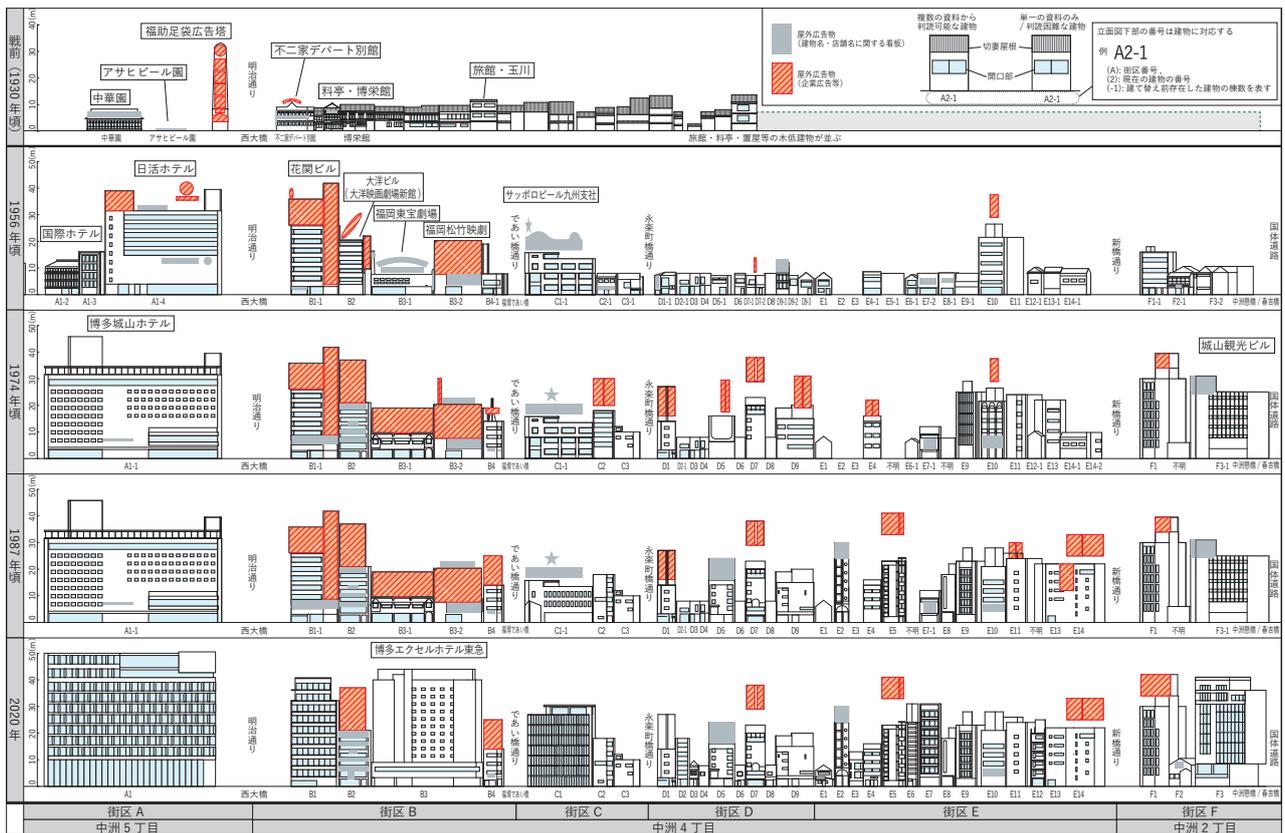


図2 各年代の復元立面図

表1 戦後各建物の用途と屋外広告物の有無

1956年頃			1974年頃			1987年頃			2020年		
番号	建物の種類	用途	番号	建物の種類	用途	番号	建物の種類	用途	番号	建物の種類	用途
A1-2	RC/S	ホテル	A1-1	RC/S	ホテル	A1-1	RC/S	ホテル	A1	RC/S	事務所
A1-3	RC/S	ホテル									
A1-4	RC/S	ホテル									
B1-1	RC/S	ホテル	B1-1	RC/S	ホテル	B1-1	RC/S	ホテル	B1	RC/S	ホテル
B2	RC/S	ホテル	B2	RC/S	ホテル	B2	RC/S	ホテル	B2	RC/S	ホテル
B3-1	RC/S	劇場	B3-1	RC/S	カフェ	B3-1	RC/S	カフェ	B3	RC/S	ホテル
B3-2	RC/S	劇場	B3-2	RC/S	事務所	B3-2	RC/S	事務所	B4	RC/S	飲食店
B4-1	RC/S	飲食店	B4	RC/S	飲食店	B4	RC/S	飲食店	C1	RC/S	事務所
C1-1	RC/S	事務所	C1-1	RC/S	事務所	C1-1	RC/S	事務所	C2	RC/S	事務所
C2-1	RC/S	飲食店	C2	RC/S	事務所	C2	RC/S	事務所	C3	RC/S	飲食店
C3-1	RC/S	飲食店	C3	RC/S	飲食店	C3	RC/S	飲食店	D1	RC/S	事務所
D1-1	RC/S	飲食店	D1	RC/S	事務所	D1	RC/S	事務所	D2	RC/S	事務所
D2-1	RC/S	飲食店	D2-1	RC/S	事務所	D2-1	RC/S	事務所	D3	RC/S	事務所
D3	RC/S	飲食店	D3	RC/S	事務所	D3	RC/S	事務所	D4	RC/S	事務所
D4	RC/S	飲食店	D4	RC/S	事務所	D4	RC/S	事務所	D5	RC/S	事務所
D5-1	RC/S	飲食店	D5	RC/S	事務所	D5	RC/S	事務所	D6	RC/S	事務所
D6	RC/S	飲食店	D6	RC/S	事務所	D6	RC/S	事務所	D7-1	RC/S	事務所
D7-1	RC/S	飲食店	D7	RC/S	事務所	D7	RC/S	事務所	D7-2	RC/S	事務所
D7-2	RC/S	飲食店	D8	RC/S	事務所	D8	RC/S	事務所	D8	RC/S	事務所
D8	RC/S	飲食店	D9	RC/S	事務所	D9	RC/S	事務所	D9-1	RC/S	事務所
D9-1	RC/S	飲食店	D9-2	RC/S	事務所	D9-2	RC/S	事務所	D9-3	RC/S	事務所
D9-3	RC/S	事務所	E1	RC/S	事務所	E1	RC/S	事務所	E2	RC/S	事務所
E1	RC/S	事務所	E2	RC/S	事務所	E2	RC/S	事務所	E3	RC/S	事務所
E2	RC/S	事務所	E3	RC/S	事務所	E3	RC/S	事務所	E4-1	RC/S	事務所
E4-1	RC/S	事務所	E4	RC/S	事務所	E4	RC/S	事務所	E5-1	RC/S	事務所
E5-1	RC/S	事務所	E5	RC/S	事務所	E5	RC/S	事務所	E6-1	RC/S	事務所
E6-1	RC/S	事務所	E6-2	RC/S	事務所	E6-2	RC/S	事務所	E7-1	RC/S	事務所
E7-1	RC/S	事務所	E7-2	RC/S	事務所	E7-2	RC/S	事務所	E8	RC/S	事務所
E8	RC/S	事務所	E9	RC/S	事務所	E9	RC/S	事務所	E10	RC/S	事務所
E9	RC/S	事務所	E10	RC/S	事務所	E10	RC/S	事務所	E11	RC/S	事務所
E10	RC/S	事務所	E11	RC/S	事務所	E11	RC/S	事務所	E12-1	RC/S	事務所
E11	RC/S	事務所	E12-1	RC/S	事務所	E12-1	RC/S	事務所	E12-2	RC/S	事務所
E12-1	RC/S	事務所	E12-2	RC/S	事務所	E12-2	RC/S	事務所	E13-1	RC/S	事務所
E12-2	RC/S	事務所	E13-1	RC/S	事務所	E13-1	RC/S	事務所	E14-1	RC/S	事務所
E13-1	RC/S	事務所	E14-1	RC/S	事務所	E14-1	RC/S	事務所	F1-1	RC/S	事務所
E14-1	RC/S	事務所	F1-1	RC/S	事務所	F1-1	RC/S	事務所	F2	RC/S	事務所
F1-1	RC/S	事務所	F2	RC/S	事務所	F2	RC/S	事務所	F3	RC/S	事務所
F2	RC/S	事務所	F3	RC/S	事務所	F3	RC/S	事務所			
F3	RC/S	事務所									

(B1-1,B2), 劇場 (B3-1,B3-2), 事業所 (C1-1) が立地し, RC 建築物が立ち並ぶ (表1)。その他の街区では一部 RC 建築物の立地 (E10,F1-1) が見られるものの, 大部分は低層木造で構成されている。1974年頃の東中洲は街区 A においてホテル3棟 (A1-2,A1-3,A1-4) が博多城山ホテル (A1-1) に建て替わり, 低層木造 (B4-1) の他, 街区 C~街区 E の低層木造群においても10棟の RC 建築物 (C2,C3,D1,D5,D7,D9,E4,E7-1,E9,E11,E13) が登場し, 中洲の景観が大きな変貌

を遂げた。1987年頃になるとさらに街区 E の低層木造4棟 (E2,E5,E8,E14) が建て替えられ, 高層のテナントビルが立ち並ぶ。この年代では街区 A,B,C,F では大きな変化は見られない。その後, 2020年にかけて街区 A,B,C,F で RC 建築物が建て替えられ, さらに高層化した。特に2010年以降建て替えられた A1,B1,C1,E7,F3 ではファサードの大部分をガラス窓が占めており, 中洲全体の景観が大きく変化した。

### 2-3. 屋外広告物の立地

戦前期の屋外広告物は明治通り沿い周辺に目立って立地していた。1956年頃は街区 A,B に立地した RC 建築物に屋外広告物や広告塔が設置された。高さのある建物の壁面を利用して, 河川に対して正面に設置されており, ホテル名や劇場の放映作品など建物に関連した内容が中心である。1974年頃は街区 C~E に立地した RC 建築物10棟のうち, 6棟に屋上設置広告物が確認された。河川に対して斜めを向くように設置されており, 内容は酒類に関連した企業広告が特徴的である。1987年は新たに屋上設置広告物が確認された一方で, C2,D9 で屋外広告物が撤去される動きが見られた。しかし現在, 街区 A,B,C,F で建て替えられた後の高層建築物 (A1,B1,B3,C1,F3) や, 街区 C,D,E に新たに立地した RC 建築物 (D2,E3,E6,E7,E12) には屋上広告物が確認されなかった。さらに複数の建築物 (D1,E11,E13) で屋外広告物が撤去されている。



## 4. 中洲界隈における屋外広告物の集積とその要因

### 4-1. 広告塔・屋外広告物の立地の変化

明治期の川沿いの広告は、中島町付近の「松居織工場」のみであった。しかし、西大橋が竣工し、市内電車が開通してからは、明治通り周辺に広告物が集積した。西大橋東詰では、第13回共進会時(1910年)に「酒の萬代」の広告塔が、大正12年(1923年)には「福助足袋」の広告塔(再図2)が登場し、西大橋西詰においても、1936年頃に「グリコ」の広告塔が登場した。この他に、明治通り付近に立地する飲食店等には歩行者の目を引く看板が設置されており、この時期には中洲のメインストリートが中島町から明治通りへ移行していることがわかる。

昭和期に広告物が集積した明治通り近傍には戦後も広告物の立地が確認された。建物疎開跡地には、遊歩道が整備されるまでの間、「森永」や「セイコー」の広告塔が登場した。その後、昭和30年前後に立地した「花関ビル」や「日活ホテル」をはじめ東中洲の広範囲で屋外広告物が設置された。一方、西大橋西詰では戦後期にも広告物が登場し、「森永」、「白鶴」などの広告塔や大洋映画劇場による放映作品の看板が掲出された<sup>(4)</sup>。これらの広告物は1980年以降確認されず、西大橋の架け替えに伴い撤去されたと推察できる。

昭和40年代にかけて屋外広告物が集積した一方で、1990年以降に立地する建築物には屋外広告物が掲出されない傾向にある。建替時に屋外広告物の設置を検討するも、広告のスポンサーが見つからないために、実現しなかった例があり、広告媒体の重要性が変容しているためである<sup>(5)</sup>。この他、屋外広告物を設置していた建築物においても広告物が撤去されたことで中洲全体の看板・広告物の数は減少した。

### 4-2. 屋外広告物集積の要因

本節では中洲地区に屋外広告物が集積した要因を考察する。屋外広告物は通常、人目につく場所に設置される。その点では、中洲地区への通行・滞在できる機会や場所が増加したことが要因の一つにあげられる。西大橋架橋後、明治通りは中島町に並んで、主要な交通経路として機能していた。特に那珂川兩岸には、それぞれ福岡市内電車の電停が設置され、他の通りに比



図4 1974年ごろの屋外広告物の分布

べ多くの利用客が通行する場所となった。さらに戦後、歩道整備や公園の開園等により、人々が滞在できる場所が増え、東中洲への眺望性が向上した。

もう一つの要因に、昭和30年ごろ「大洋ビル(中洲大洋映画劇場新館)(B2)」、「東宝映画劇場(B3-1)」、「福岡松竹映劇(B3-2)」が立地したことがある(再図2)。街区Bは天神方面からのアイストップの位置にある(図4)。この場所に単に広告塔のようなメディアに留まらない、映画という活動と関係性の高い看板が立地したことで多くの利用者の目にとまるようになった。そのため東中洲一帯の宣伝効果が向上し、昭和40年代の高層化した建物にも屋外広告物が設置されたと考えられる。

## 5. 研究のまとめ

本研究では写真や絵葉書等の歴史的資料をもとに、河川沿いの看板・広告物の立地から、景観の形成要因を分析した。中洲地区では近代以降の大規模施設として開発された場所が戦後、東中洲の機能の骨格なり人々が通行・滞在する場所が広がったことで広告物が集積し、いわゆる「中洲の景観」が形成された<sup>(6)</sup>。

昭和40年代に建設されたビル群は再び建て替えの時期に差し掛かる。加えて、景観行政は現在、広告物の掲出に関して中洲地区に限定した制限、制度等は設けておらず<sup>(7)</sup>、掲出される看板・広告物はさらに減少し、中洲特有の景観はさらに変化する可能性がある。

中洲特有の景観の価値や保存の必要性を議論することが望まれ、本稿はその一助となることを期待する。なお、本研究は中洲の一部の地区に限られている為、対象範囲の拡大や、復元立面図の精度の向上などは建物の個別の事情の分析と合わせて今後の展望とする。

### 謝辞

研究調査に際し多大なるお力添え・助言を頂いた、益田啓一郎氏、現地調査へのご協力・情報提供を頂いた九州ネオン電機株式会社、福岡市都市景観室、大洋映画劇場株式会社にはこの場を借りて、深甚なる感謝を申し上げます。

### 脚注

- (1) 景観の復元図においては、古写真、絵葉書から89枚の写真を使用した。
- (2) 立面図の作成については、空中写真や住宅地図(福岡地典、福岡市縦横無尽図)から建物の位置と概形を把握し、古写真上で透視図を用いておおよその高さを算出した。建物表面の凹凸や開口部等は写真から判読できる部分に限定して図面に反映させた。
- (3) 一般財団法人民事法律協会登記情報提供サービスによる。
- (4) 株式会社大洋映画劇場へのヒアリング(2021.11)による。
- (5) 九州ネオン電機株式会社へのヒアリング(2020.11)による。
- (6) 1975年山陽新幹線が開通した。1980年前後に発刊された中洲の飲食店を取り上げた書籍には、屋上に広告物を設置するビル群の写真が散見される。
- (7) 福岡市都市景観室へのヒアリング(2020.12)による。

### 参考文献

- 1) 福岡地域戦略推進協議会都市再生部会(2013)「福岡都市再生戦略」<http://www.fukuoka-dc.jp>。com/wp-content/uploads/2013/06/20130607\_PublicForumPF\_jpnWEB1.pdf(2021年1月25日最終閲覧)
- 2) 平岡直樹(2005)「天竜川沿線における新旧写真比較から見る景観の変容に関する研究」(ランドスケープ研究、vol88-5、pp791-794)
- 3) 萩島哲(1996)「風景画と都市景観-水・緑・道・まちなみ-」(理工図書)
- 4) 嶋心治、萩島哲他2名(1996)「広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察」(日本建築学会計画系論文集、第482号、pp155-163)
- 5) 宮崎大、樋口明彦、高尾忠志(2007)「近代以降の博多川・那珂川周辺における水辺利用の変遷についての研究」(土木計画学研究・講演集 vol34)
- 6) 映山恭三(1979)「博多中洲ものがたり(前編)」(株式会社文献出版発行)
- 7) 映山恭三(1980)「博多中洲ものがたり(後編)」(株式会社文献出版発行)
- 8) 落合栄吉(1967)「戦後博多復興史」(戦後博多復興史刊行会発行)
- 9) 澄川洗之助(1972)「博多・劇場50年のあゆみ」(福岡市興行協会発行)
- 10) サッポロビール株式会社広報部社史編集室(1996)「サッポロビール120年史」(サッポロビール株式会社発行)